神の知恵

エイドリアン・エベンス

神の知恵
大争闘についての序論

2010 年 8 月執筆/2025 年 11 月改訂
Copyright © 2025, Adrian Ebens
Maranathamedia.com

著者の人格権は主張されています。
本書およびその他すべてのマラナタ・メディアの出版物は、当社ウェブサイト *maranathamedia.com* で入手可能です。追加のコピーをご注文の場合は、adrian@maranathamedia.com までメールでご連絡ください。

本書は
執筆：Adrian Ebens
編集・校正：Danutasn Brown
表紙デザイン：Adrian Ebens
組版： Ms 明朝 10.5/14

本書は当初、一連の論文として執筆され、その後編集を経て現在の形にまとめられたものである。ここでは、大争闘の起源を、父と子の関係を中心とした物語として描いている。本書の内容は、アイデンティティを理解する上での基礎を成すものである。

信仰、希望、そして愛を込めて
Adrian Ebens

目次

1. 私たちの父 5
2. 万物の主 7
3. 神の知恵 9
4. 平等性 14
5. 御心 16
6. 危機の到来 17
7. 御姿にかたどって 20
8. 偽りの父 25
9. 人類の誘惑 26
10. 要約 30
11. 二つの道 32
12. バビロンの基礎 33
13. バビロンの本質 36
14. 継承の系統 39
15. バビロンからの召し出し 44

1. 私たちの父

ある時、イエスのもとに弟子たちが近づき、非常に重要な願いを申し出ました。

> また、イエスはある所で祈っておられたが、それが終ったとき、弟子のひとりが言った、「主よ、ヨハネがその弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈ることを教えてください」。ルカによる福音書 11 章 1 節

イエスが与えられた答えは、私たちが神について知る上で最も重要なことを示しています。祈りの行為とは、神と話し、神と交わろうとすることです。イエスが最初に用いられた呼び名は、神の核心的なアイデンティティ、すなわち神がどのようなお方であるかを明らかにしています。イエスは、祈るときに私たちが神をこのように呼ぶよう教えられました。

> そしてイエスは彼らに言われました。祈るときには、こう言いなさい。天におられる私たちの父よ。ルカによる福音書 11 章 2 節

私たちの父。神についてどれほど多くのことを考えるにしても、神は何よりもまず父であります。この単純な表現は、神について非常に多くのことを語っています。それは、何よりもまず神が関係性のある存在であるということです。神は、私たちが関係性のある言葉でご自身に話しかけることを望んでおられます。父という呼び名は、単に能力や力を語るものではなく、宇宙との関係やつながりの観点から語るものです。神はすべてのものの父、すなわち源であられます。では、神はどのような父なのでしょうか。

モーセはかつて神に、神の栄光、すなわち、神にとって最も特別なものを示してほしいと求めました。すると神は、このように答えられました。

> ときに主は雲の中にあって下り、彼と共にそこに立って主の名を宣べられた。主は彼の前を過ぎて宣べられた。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことととの豊かなる神」。出エジプト記 34 章 5〜6 節

神がモーセに示されたことに注目してください。神はご自身の品性について語られました。これこそが神について最も栄光に満ちたこと、すなわち神の品性です。神はあわれみ深く、恵みに満ち、忍耐強く、善意と誠実さにあふれています。私たちが生きるこの世界では、これらの特性

は非常に稀ですが、もし誰かの中にこれらを見いだすなら、私たちの多くは深く感謝します。使徒ヨハネは、神の品性を次のようにまとめました。

> 愛さない者は、神を知らない。神は愛である。ヨハネの第一の手紙 4 章 8 節

神は、すべての被造物を深く心にかけておられる愛に満ちた父です。では、その神の創造はどれほど広大なのでしょうか。聖書は、神が天と地のすべての父であると教えています。

> こういうわけで、わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあって父と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。エペソ人への手紙 3 章 14〜15 節

宇宙全体は私たちの天の父に属しており、この宇宙に存在するすべての者は、神の家族の一員です。これほど多くの存在がいるのですから、神がすべての者を思いに留めることなどできず、誰かは忘れられてしまうのではないかと思いがちですが、この点についてイエスが語られた言葉を注意深く聞いてください。

> 五羽のすずめは二アサリオンで売られているではないか。しかも、その一羽も神のみまえで忘れられてはいない。その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。ルカによる福音書 12 章 6〜7 節

神は誰ひとり忘れられることがありません。神は私たちのすべてを知っておられ、私たちの人生、行動、そして思いに深い関心を持っておられます。実際、神が私たちを思うことを決してお止めになりません。

> わが神、主よ、あなたのくすしきみわざと、われらを思うみおもいとは多くて、くらべうるものはない。わたしはこれを語り述べようとしても多くて数えることはできない。詩篇 40 篇 5 節

神は、私たちのために特別な計画を持っておられ、私たちがどのような者になり得るのかについて、夢を抱いておられます。

> わたしは、おまえたちのために立てた計画をよく知っている。それは災いではなく祝福を与える計画で、将来と希望を約束する。エレミヤ書 29 章 11 節（新国際版）

私たちが持っている良いものは、すべて神から来ています。

> あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。ヤコブの手紙 1 章 17 節

神が私たちに対してどのような思いを抱いておられるのか、その最も素晴らしい現れは、神のひとり子であるイエスが洗礼を受けたときに語られた御言葉の中にあります。神はこう言われました。

> そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。マタイによる福音書 3 章 17 節

神は、ご自身の御子を人間として愛しておられました。神は御子を非常に喜ばれました。そして素晴らしいことに、イエスが神の御子であると認めるとき、私たちも同じ受け入れを経験することができるのです。

> これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである。エペソ人への手紙 1 章 6 節

私たちはこれから、イエスの役割について、またイエスがなぜ地上に来られたのか、そしてなぜ私たちが彼を通して受け入れられることができ、また受け入れられる必要があるのかを、さらに詳しく探っていきます。しかし、ここで強調しておきたい最も重要な点は、神が私たちを深く気にかけ、私たちの人生のあらゆる側面に関心を持っておられる、愛にあふれた優しい父であるということです。

2. 万物の主

前の章では、神が私たちのことを絶えず思い続け、私たちの未来のために計画と夢を持っておられる愛に満ちた父であることに気づきました。また、神が全宇宙の父であることにも気づきました。この章では、神がそのような立場におられ、またそのような働きをなさることを可能にする特質は何であるのかを見ていきたいと思います。

聖書がまず最初に教えているのは、神が万物の主であり、支配者であるということです。

> わたしたちには、父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出ているのです…コリント人への第一の手紙 8 章 6 節

> 世々の支配者、不朽にして見えざる唯一の神に、世々限りなく、ほまれと栄光とがあるように、アーメン。ティモテオへの手紙一 1 章 17 節

> イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。申命記 6 章 4 節

父なる神は、すべてのものが来る唯一の神です。神はその力も、知恵も、知識も、誰からも受け取ったわけではありません。私たちが見るすべてのものは、神から来たのです。

> 見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕は世を治める。見よ、その報いは主と共にあり、その働きの報いは、そのみ前にある。主は牧者のようにその群れを養い、そのかいなに小羊をいだき、そのふところに入れて携えゆき、乳を飲ませているものをやさしく導かれる。だれが、たなごころをもって海をはかり、指を伸ばして天をはかり、地のちりを枡に盛り、てんびんをもって、もろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはかったか。だれが、主の霊を導き、その相談役となって主を教えたか。主はだれと相談して悟りを得たか。だれが主に公義の道を教え、知識を教え、悟りの道を示したか。見よ、もろもろの国民は、おけの一しずくのように、はかりの上のちりのように思われる。見よ、主は島々を、ほこりのようにあげられる。イザヤ書 40 章 10～15 節

> 神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょう。人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得、あなたの家の豊かなのによって飽き足りる。あなたはその楽しみの川の水を彼らに飲ませられる。いのちの泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの光によって光を見る。詩篇 36 篇 7～9 節

神は全能であり、その力には限りがありません。終わりがないのです。何兆もの原子に内包されている力は、すべて神から来ています。その力は私たちの理解をはるかに超えています。神の知識は無限であり、極めて広大です。何かが始まるとき、神はその終わりを完全に知っておられます。すべての知恵と知識は神から来ているのです。

この力と知恵は、川のような神の御霊によって私たちに流れ出てきます。

> 御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から流れ出ている。ヨハネの黙示録 22 章 1 節

一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。神がその中におられるので、都はゆるがない。神は朝はやく、これを助けられる。詩篇 46 篇 4、5 節

神は御霊を通して、同時にあらゆる場所に存在することができます。私たちはこの能力を「遍在」と呼びます。これもまた理解するのが非常に難しいことですが、聖書が何と語っているかに注目してください。

わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。わたしがあけぼのの翼をかって海のはてに住んでも、あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。詩篇 139 篇 7〜10 節

この川は、いのちの川であり、いのちのすべての要素は御霊から来ています。私たちの内にある神のいのちを与える御霊こそが、私たちを生かし、心臓を鼓動させ続けているのです。

この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちの息と万物とをお与えになった方だからです。神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、「私たちもまたその子孫である」と言ったとおりです。使徒の働き 17 章 24〜28 節

まとめると、私たちは、全能であり、知識は無限であり、御霊によってあらゆるところに存在する一人の神がおられることが分かります。すべての権威と力は神に属し、神が与える者に委ねられるのです。

3. 神の知恵

全能であり、すべての知恵を持っておられるお方が、出来ないことがあると考えるのは、私たちにとって大きな驚きでしょう。しかもそれは、父なる神が御国を確立する上で欠かすことのできない、極めて重要なことなのです。

すべてのいのちも、力も、知恵も神から来るという事実の深い意味を考えると、神が宇宙の何百万もの存在を創造し、彼らにリストを渡してそれに従えと言うことはできなかったことに気づきます。神に従い、神を信頼し、神のやり方を守る力そのものが、神の御座から流れ出る川の一部とならなければならなかったのです。

問題は、神は誰にも服従せず、誰に対しても従う必要がなく、また他者のやり方に従う必要もないということです。したがって、神はこれらを提供することができませんでした。そこで神は偉大な知恵によって、神の正確なかたちとしてご自身から御子を生み出されました。神はご自身の持つすべてを御子に与え、そして御子を通して万物を創造されたのです。これをご覧ください。

> 神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。御子は、その受け継がれた名が御使たちの名にまさっているので、彼らよりもすぐれた者となられた。いったい、神は御使たちのだれに対して、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」と言い、さらにまた、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう」と言われたことがあるか。ヘブル人への手紙 1 章 1〜5 節

> 父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。ヨハネによる福音書 5 章 26 節

> さて、イエスは彼らに答えて言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。子は父のなさることを見てする以外に、自分からは何事

もすることができない。父のなさることであればすべて、子もそのとおりにするのである。ヨハネによる福音書 5 章 19 節

わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない。ヨハネによる福音書 8 章 29 節

イエスは彼らに言われた、神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわたしを愛するはずである。わたしは神から出た者、また神から来ている者であるからだ。わたしは自分から来たのではなく、神からつかわされたのである。ヨハネによる福音書 8 章 42 節

あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの霊力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。 キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらである。コロサイ人への手紙 2 章 8〜10 節

神の宇宙に今必要なすべてのものは、御子のうちに宿っていました。力、知恵、いのち、そして従順と信頼、父の権威を認める心、父の愛と受け入れの感性も含まれます。神の御子は、神ご自身の完全さであり、神の国の絶対的な基盤なのです。

それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。 それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、 また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。ピリピ人への手紙 2 章 9〜11 節

そこで父は御子を高め、宇宙にとっての神の力と模範とされました。神は、御子の御霊をすべての被造物にいのちを与え、祝福の感覚、そして服従と信頼の従順の知識を与えるでしょう。キリストの御霊なしには、神にどのように従い、信頼し、従順であるべきかを知ることは不可能です。聖書が何と語っているかご覧ください。

御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、啓示録 22 章 1 節

わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。ヨハネによる福音書 15 章 26 節

しかし、神の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。もし、キリストがあなたがたの内におられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである。ローマ人への手紙 8 章 9、10 節

これが、イエスが神の知恵と力と呼ばれる理由です。キリストの人格は、神の御霊を通して宇宙全体へ運ばれ、すべての被造物へと届きます。私たちの心に入ってくるのはキリストの知恵であり、それが父を愛し、父に従う方法を教えてくれます。また、私たちの存在のあらゆる神経と繊維にいのちを与え、私たちを生かし続けているのはキリストのいのちなのです。

召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。コリント人への手紙一 1 章 24 節

あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。コリントの信徒への手紙一 1 章 30 節

したがって、人のうちにあるキリストの御霊こそが、物事を行う知恵を与え、正しく善く生きる力を与えるのです。ソロモンは、この知恵が宇宙の中でどのように働いているかについて語りました。

知恵であるわたしは悟りをすみかとし、知識と慎みとをもつ。主を恐れるとは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪しき道と、偽りの言葉とを憎む。計りごとと、確かな知恵とは、わたしにある、わたしには悟りがあり、わたしには力がある。 わたしによって、王たる者は世を治め、君たる者は正しい定めを立てる。わたしによって、主たる者は支配し、つかさたる者は地を治める。わたしは、わたしを愛する者を愛する、わたしをせつに求める者は、わたしに出会う。富と誉とはわたしにあり、すぐれた宝と繁栄もまたそうである。わたしの実は金よりも精金よりも良く、わたしの産物は精銀にまさる。わたしは正義の道、公正な道筋の中を歩み、わ

> たしを愛する者に宝を得させ、またその倉を満ちさせる。箴言 8 章 12〜21 節

彼は次に、神がどのようにしてご自身の子を生み出し、確立されたかを説明しています。

> 主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、わたしはすでに生れ、山もまだ定められず、丘もまだなかった時、わたしはすでに生れた。すなわち神がまだ地をも野をも、地のちりのもとをも造られなかった時である。彼が天を造り、海のおもてに、大空を張られたとき、わたしはそこにあった。彼が上に空を堅く立たせ、淵の泉をつよく定め、海にその限界をたて、水にその岸を越えないようにし、また地の基を定められたとき、わたしは、そのかたわらにあって、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽しみ、その地で楽しみ、また世の人を喜んだ。箴言 8 章 22〜31 節

私たちは御子のために父に感謝すべきです。もし御子がいなければ、宇宙は成り立たず、何一つ正しく機能しません。こうして私たちは、神格の完全な姿がどのように一つに結集されているかを見ることができます。父は万物の源である唯一の真の神です。父はご自身から御子を生み、その御子にすべてを与えられました。宇宙を運行させるために必要なすべての要素は御子から流れ出ています。御子のうちには、信頼し服従する従順さと結びついた力と知恵があります。そして御子の人格は、遍在する神の御霊によって宇宙へと流れ出ていきます。これは実に見事な仕組みであり、神がこれをお造りになったことは、まさに驚くべき知恵の現れなのです。

パウロはこれを見事に要約して、こう言っています。

> わたしたちには、父なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て、わたしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリストのみがいますのである。万物はこの主により、わたしたちもこの主によっている。コリントの信徒への手紙一 8 章 6 節

4. 平等性

前の章では、神が宇宙の基礎を築かれた際に示された驚くべき知恵について学びました。神性のあらゆる属性を備えた御子を生み出すことによって、神の完全さが神の御霊を通してすべての被造物の心に届けられるようになったのです。そして神が次になさったことは、創造の中でどのような地位にある者であっても、すべての道徳的存在に対する平等の本質的な定義を提供することでした。

父は御子にご自身と等しい権威をお与えになりました。注意深く見ると、御子の平等性は、御子に与えれれた力ではなく、父の権威と祝福によってもたらされたものであることが分かります。もし御子が単に同じ力を持っているから父と等しいと見なされるのであれば、平等の定義は力の同等性に基づくことになります。その定義は、御子がその力の示すことによって自らの平等を証明する潜在的な立場に置かれることを意味します。まさにこれは、荒野でサタンがイエスに要求したことです。父とのつながりを証明するための力の示威です。ありがたいことに、御子は父の祝福された御言葉の中に安らいでいます。ただ父を信頼し、誰に対しても何も証明する必要がありません。父と御子の関係は、宇宙全体の基準となる関係となりました。あらゆる階級の存在同士の関係は、この関係を模範として形づくられるのです。父は御子を、ご自身と等しい者とされました。

> キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互いに生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わない。ピリピ人への手紙 2 章 5、6 節

> 父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。ヨハネによる福音書 5 章 22、23 節

この段階によって、平等の定義が関係的な範囲であることを賢明に保証されました。つまり、彼らを平等とするのは、父によって定義された関係であることを意味します。御子が持つあらゆる力は父から受け継いだものであり、それらは平等の定義には含まれません。等式の中で価値を持たなくなるのです。神がこのようにされたのは、創造された存在たち

が、自分に与えられた才能や能力を互いに比較するのではなく、むしろ互いを知り、理解し合う力によって自分の価値を見いだすようにするためでした。

父と御子の平等の性質は、宇宙全体にとって非常に重要な定義となります。この関係を誤って理解するなら、神の御国の本質そのものを誤解することになります。神の御子について最も素晴らしいことの一つは、御子が父について知り得るすべてのことを知っておられるという点です。宇宙全体に父がどのようなお方であるかを説明できる人は、御子のほかにいません。イエスが父とのご自身の平等性を関係的な観点でどのように語られたかに注目してください。

> 父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っている。ヨハネによる福音書 10 章 15 節

したがって、イエスは確信をもって言うことができました。

> わたしを見た者は、父を見たのである。ヨハネによる福音書 14 章 9 節

これは、何か神秘的な一つの本質の声明ではありません。それは、イエスが父について知り得るすべてを知っておられ、その品性と人格に満ちておられるという声明なのです。宇宙の中で、父の御心を完全に知り、同時にすべての被造物の心を理解できる存在は、御子ただお一人です。この関係は、私たちが礼拝する対象は、彼らが共に持つ力ではなく、彼らの間にある愛に満ちた関係であることを確実なものにします。

預言者エレミヤは、次のように語ったとき、神の王国の栄光を明らかにします。

> 主はこう言われる、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶ」と、主は言われる。エレミヤ書 9 章 23～24 節

このようにして、神の御国全体の基調を決定づける平等の定義は、父と御子それぞれの独自性そのものと、彼らがどのように関係しているかの

中に組み込まれていることが分かります。御子が父と力を共有しておられるのは、御子ご自身が持ち込める力や地位によって決まるのではなく、ただ父の御心と喜びによってのみ決まるのです。

> それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。ピリピ人への手紙 2 章 9 節
>
> さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに当って、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」と言われた。ヘブル人への手紙 1 章 6 節
>
> すると雲の中から声があった、「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」。ルカによる福音書 9 章 35 節

平等は、御子の属性ではなく、父の権威に基づいています。この定義の中で、父と御子はそれぞれ固有の独自性を保ちながら、同時に等しい者として存在しているのです。

この定義の重要性は、最初は明らかでないように思えるかもしれませんが、その影響は人類にとって非常に大きく、特に男女の平等や、その平等を何が定義するのかについて語るときに顕著に表れます。

5. 御心

こうして、神の御子の御霊が、全宇宙へと流れ出し、すべての存在の心と思考の中に生きていることが分かります。神の宇宙が真に関係的であるためには、神が創造された存在が、この命を与える御子の御霊を受け入れるか拒むかを選ぶ能力を持っていなければなりませんでした。この選ぶ力がなければ、創造全体は完全に自動化され、機械的になってしまいます。神は、創造されたすべての道徳的存在に選ぶ力を持つ意志を与えられました。しかしこの選ぶ力は、ただ一つの選択に限定されています。それは、神を愛し、神とその御子を通して与えられる命の御霊を受け入れるか、それとも神の命を拒んで自分自身に死をもたらすかのどちらかです。

> もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える

> 者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。ヨシュア記 24 章 15 節
>
> 心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。箴言 3 章 5、6 節

選ぶ力とは、各個人が神の御子の命を与える特質を自分自身のものとして受け入れることを意味します。御子の父に対する愛は私たちの愛となり、御子の従順と信頼は私たちの従順と信頼となります。服従し続ける選択によって、神の義は私たちのものになります。本来、この従う力と選ぶ力は、いのちの川を通して自由に流れていましたが、これから見るように、宇宙に危機が訪れ、神の家族を乱し、すべての者に大きな痛みをもたらしたのです。

6. 危機の到来

すべてのものが整ったとき、神の御子は宇宙を創造する務めを委ねられました。彼は父の力を通して、すべての星々、惑星、そしてあらゆる生き物を創造されました。さらに彼は、数えきれないほどの天使たちを創造され、その最初の者はルシファー、光を運ぶ者と呼ばれました。

> 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。ヨハネによる福音書 1 章 1〜3 節
>
> 更にまた、イエスキリストを通した万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。エペソ人への手紙 3 章 9 節
>
> 神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。ヘブル人への手紙 1 章 1、2 節

ルシファーは、神の御子の地位を知っており、御子が神性の満ちたものすべてを相続として受けておられることも理解していました。彼は次第に、御子のうちの神の知恵を見失い始めました。意志という賜物を通し

て、彼は御子がどのような根拠で神と等しいとされるのかを問い始めたのです。そして彼は、御子の地位を欲するようになり、もし御子がその地位を受けられるのであれば、なぜ自分にはそれができないのかと考えました。なぜ神のようになれる第三の独立した存在があってはならないのか、と疑問に思いました。彼は、宇宙全体を支える御子と従順な御霊の重要な役割を理解していませんでした（コロサイ 2 章 9〜10 節）。

神と御子の本質と人格を大切にする代わりに、ルシファーは神の力と地位を欲するようになりました。彼がたどり着いた論理の一つは、もし御子が神から生まれたのであれば、御子は神と等しいはずがないというものでした。彼は、本質的に力を持たず、自らの存在を他者に依存している存在を、なぜ自分が礼拝しなければならないのかと考えました。そして、自分が御子と同じ地位を受けることを認めるべきだ、さもなければ御子が神と等しいとされることは自分にとって略奪である、と結論づけるに至ったのです。

> キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。 キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わなかった。ピリピ人への手紙 2 章 5、6 節

> 橋明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう」。イザヤ書 14 章 12〜14 節

> わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であった。エゼキエル書 28 章 14、15 節

ルシファーは心の中で、自分の王座を神の星々や天使たちの上に確立しようと考えました。彼は、至高者の地位にまで上り詰めようとしたのです。彼のすべて関心は、力と地位を手に入れることだけにありました。神の御品性を求めるのではなく、ただ神の地位と力だけを求めていたのです。

ルシファーがどのようにしてこのような考えに至ったのかは神秘です。聖書はその詳細を語っていません。しかし、神がすべての存在に選ぶ力を与えられたゆえに、ルシファーはその力を用いて、自らの心を神の知恵からそらし、神とその宇宙の計画に従うことを拒んだのです。

神はルシファーに、彼が進もうとしていた方向について、理性的に向き合おうとされました。神の御子がその地位を持っておられる理由を彼に説明されました。しかし、ルシファーは耳を傾けることを拒み、ついにサタン、告発者となりました。彼は、神が不完全な王国を築いたと非難し、神の御子を礼拝することを拒みました。その代わりに、彼は、もし自分が神と等しくなれないのであれば、他の誰からも力を受けず、もともと自ら固有の力を持つ神だけを神として受け入れると決意したのです。

ここに非常に重要な点があります。神だけが命の源です。神に反対し、信頼と従順を拒むことは、その瞬間に命からあなたを切り離すことになります。命は神への従順の中にのみ存在し、そして従順は御子の御霊を通してのみ私たちに与えられます。これこそが、父と御子が共に非常に重要である理由の一つなのです。ルシファーは従うことを拒むことで、御子の従順な御霊に抵抗しました。この抵抗という行為そのものが、憎しみであり、殺意の行為なのです。なぜなら、肉欲的な思いは神に敵対するからです。（ローマの信徒への手紙 8 章 7 節）。サタンが神に逆らったとき、神は即座に決断を下さなければなりませんでした。それは神があらかじめ準備していた決断でしたが、今まさに実行されなければならないものでした。神に抵抗することは、ルシファーがキリストの御霊に「ノー」と言ったということで、それは、神の御子を殺すという行為でした。彼は、あなたの力は欲しいが、あなたの御子はいらないと言っていたのです。神は、ルシファーが命の源を手放したことによってすぐに死なせるか、あるいはルシファーが心の中で実際に行っていたことに応じて御子に死をお許しになるかのいずれかを選ばなければなりませんでした。キリストの死は、神による復讐を遂げるための司法的な正義の行いではなく、命は神と御子からのみ来るという宇宙の自然法則の表れなのです。ルシファーは、神の御子としての存在を受け入れることを選ばなかったため、この死から利益を得ることは決してありません。しかし、キリストの死は、サタンとその天使たちのすべての計画を明るみに出す

ための代償となり、宇宙がサタンの心の中に何があったのかを理解できるようにしました。もしルシファーが御子の代わりに最初からその決断を下して死んでいたら、誰もその理由を理解できず、神は愛されるのではなく恐れられる存在になっていたでしょう。神の御子は、神の御心に抵抗する貨物列車に巻き込まれまれてしまいました。神はその列車を脱線させるか、あるいは御子の死をお許しにならなければならず、神は、私たちが神の本当の姿を知ることを望まれました。これこそが、十字架の死の本当の意味、すなわち、神の国における神の真の正体を知ることなのです（ヨハネによる福音書 17 章 3 節）。

サタンは自分の考えを他の天使たちに広め始め、ついには三分の一の天使たちがルシファーの主張は正しいと思うようになりました。なぜ、すべてを父から受け継いだだけの御子に従わなければならないのか。彼の何が特別なのか。彼らは神の御心に従うことを拒否しました。悲しいことに、天では言葉の戦い（ポレモス）が起こり、サタンとその従者たちは追放されました。

> さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。
> ヨハネの黙示録 12 章 7〜9 節

神はサタンを死なせることもできましたが、彼の危険な思考の種が明らかになる必要がありました。サタンは御子を通して与えられる唯一の命を拒んだため、そのまま滅びへと委ねられても当然でした。しかし、もし彼が即座に死んでいたなら、天使たちや宇宙の他の存在は、神が実際に力で彼を破壊したと思い始めるかもしれず、それが神は本質的に暴力的なのではないかというサタンの嘘につながるでしょう。そのため、すべての者は、命は御子を通してのみ創造物に与えられるということを自ら学ばなければなりません。そして宇宙のすべての存在が、神が正しいのか、サタンが正しいのかを決める機会を得ることになるでしょう。

7. お姿にかたどって

サタンと三分の一の天使たちは、御子の地位と父なる神との関係において疑いを持っていました。父と御子の関係がどのように始まったのかを確認する者は誰もいなかったため、彼らは父が最善を知っておられるということを信頼するしかなかったのです。

父なる神と御子の関係が疑われる時が来ることを、神はあらかじめご存じでした。そのため神は、御子との特別な関係をもっとよく理解できるように、あらかじめご計画を立てておられたのです。神は、父と御子の間にある主導権と服従の重要な関係を、全宇宙がより近くで見られるように、ひとつの模範を示そうとされたのです。

実際、父なる神と御子が地球の計画を立てておられた時、ルシファーの不満がさらに増していったのです。ルシファーは自分がこの世界の君になりたいと願っていましたが、その願いは受け入れられませんでした。キリストがこの世界の君となることになったのは、この世界が父と御子の姿として造られることになっていたからです。そのためルシファーは、神の御子に対して嫉妬するようになりました。もしルシファーが、父と御子の特別な関係をもっと深く理解するために、この創造の計画がどれほど助けになるかを信頼して受け入れていたなら、事態は違っていたかもしれません。しかし残念ながら、そうなることはありませんでした。それでも神と御子は、地球を創造し、お二人の関係の特別な姿を宇宙に示すという計画を進められました。そして神は御子に言われました。「さあ、われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう」（創世記 1 章 26 節）。

あの創造の週に起こった、あふれるような創造の力を、いったい誰が完全に理解できるでしょうか。日ごとに、神の創造の力が御子を通して流れ出るたびに、地球はその姿を形づくっていきました。大地、草や花、木々、太陽と月、動物たちが造られました。そして、創造の頂点ともいえる存在、男と女を造るための舞台が整えられたのです。

創造の過程は非常に重要であり、それは神と御子についての大切な物語を語っています。

> 神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。創世記 1 章 27 節

これが、その出来事がどのように起こったかの過程です。

> 主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。創世記 2 章 7 節

> また主なる神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、アダムのところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。アダムがすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。それでアダムは、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、アダムにはふさわしい助け手が見つからなかった。そこで主なる神はアダムを深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神はアダムから取ったあばら骨でひとりの女を造り、アダムのところへ連れてこられた。そのとき、アダムは言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。創世記 2 章 18～25 節

神は御子を通して、地のちりからアダムを形づくられました。そしてその後、命の川が彼の中に流れ込むか、吹き込まれたのです。そのとき、神の御子が持っておられる尊い性質、すなわち父の祝福を感じる心と御子のうちにある愛に満ちた信頼と従順は、喜びとともにアダムの意志を通り、彼の一部となりました。そのためアダムは、自然と神に仕えたい、神を喜ばせたいと望みました。なぜなら、御子の思いが御霊を通してアダムの心に流れ込んでいたからです。

> 「だれが主の思いを知って、彼を教えることができようか」。しかし、わたしたちはキリストの思いを持っている。コリントの信徒への手紙一 2 章 16 節

神は、アダムを何かが欠けていることを学び始める状況に置かれました。では、なぜ神はアダムを造られたのに、あえて何かが欠けているという経験を通させるのでしょうか。ここでは、神と神の国についての興味深いことを教えています。あることは、実際に経験を通して学ぶことができ、アダムの場合、自分に欠けているものがあると気づいたことで、そ

れに対する欲求を強め、そして神がそれを与えてくださったときの感謝の気持ちを高めました。

アダムには、自分の心や考えを理解してくれる相手がいませんでした。自分の喜びを分かち合い、経験を理解してくれる存在がいなかったのです。アダムが動物たちに名前をつけていくうちに、彼のような存在は誰もおらず、理解してくれる者もいないことに気づき始めました。この経験は、神の王国において中心となるもの、つまり親密な関係への欲求をアダムに刻み込みました。それを理解する唯一の方法は、実際に体験することだというのは理にかなっています。神はアダムに、関係の重要性を教え、その素晴らしさを説明することもできましたが、動物に名前をつけるという務めを与えることで、アダムの心だけでなく頭でも、何が重要かをはっきりと悟ることができたのです。

なぜ神はアダムを眠らせ、彼の肉を開き、生きたあばら骨を取り、それを女へと形造られたのでしょうか。これは、とても複雑な方法のように見えるでしょう。この過程は、非常にためになります。エバがアダムから生み出されたという過程、アダム自身の本質から造られ、心臓の近くの脇から出てきたということは、父なる神から御子が生み出された物語を直接思い起こさせます。では、なぜ神はアダムの脳の一部を取らず、心臓の上にあるあばら骨だったのでしょうか。聖書はその理由を明確には語っていません。しかし私には、アダムの心にあった痛み、すなわち彼を理解し、彼が持っていた種を育むための従順で養育的な存在として仕える伴侶が欠如している。そのような存在が与えられることを、神はこの方法で示されたのではないかと感じられるのです。

> 神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。ヨハネによる福音書 1 章 18 節

> わたしは神から出た者、また神からきている者であるからだ。わたしは自分からきたのではなく、神からつかわされたのである。ヨハネによる福音書 8 章 42 節

> いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、わたしはすでに生れ、山もまだ定められず、丘もまだなかった時、わたしはすでに生れた。箴言 8 章 23～25 節

> なぜなら、神について知りうる事がらは、彼らには明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。ローマ人への手紙 1 章 19、20 節

先ほど挙げた聖句には、神の御子が父のふところから出て来られたことを示す、明確な証拠が見られます。「出た」と「来た」と訳される語には、本来「内から外へ出る」という意味があります。また、箴言 8 章 25 節は、御子が生み出されたことを直接語っています。使徒パウロはこの点について、創造物は私たちに神性をはっきり示しているため、私たちは言い逃れができないと述べています。

アダムが初めてエバを見たとき、目と目が合い、ここに本当に自分を理解し、感謝してくれる人がいると気づいたとき、アダムが何を思ったのか、誰もが想像できるでしょう。彼女はアダムと同じ本質を持ち、彼の種を宿し育て、子供や孫たちに従順と服従の大切さを示すために必要な、欠かすことのできない存在となる者でした。まさに神が御子にこれらの従順な性質を示す必要があったように、神は地上に王国を設立され、夫が妻なしに王国を築くことはできないようにされました。子供たちは、母という生きた模範を通してこそ、従うことの意味を学ぶことができるのです。

夫と妻の間には、深く神聖な結びつきが存在します。この関係が正しく築かれるとき、それは父なる神と御子の関係を直接示し、宇宙に対して神の御子に対するサタンの非難の偽りを絶えず思い起こさせるものとなります。

> それだから、女は、かしらに権威のしるしをかぶるべきである。それは天使たちのためでもある。コリントの信徒への手紙一 11 章 10 節

神は、夫婦という関係を通して、父と御子の関係を天使たちに教えるように設計されました。この目的のために創造されるということは、なんと素晴らしい特権でしょう。

この真理を知ることによって、私たちは結婚において非常に重要な秘密が、神の御霊に導かれ、父と御子の関係の姿へと自らをゆだねていくこ

とにあると理解することができます。夫は祝福の源としての役割を担い、妻は愛に満ちた信頼と従順を生きたかたちで示す存在となります。

アダムとエバには、高く幸せな召命が与えられました。もし彼らが父と子の姿に留まっていたなら、どれほど多くの悲しみが避けられたことでしょう。

8. 偽りの父

サタンは、もし神が自分に御子の持つ力と特権を持つことを許さないのであれば、受け継いだものではなく、本来の力を持つ神のみを礼拝すると決めました。神がサタンの提案した「改革」を受け入れなかったとき、サタンは、自分がなおも父なる神に命を負っているという現実を認めざるを得ない立場に置かれました。

もしサタンが、すべての力が神から来ることを認め続けなければならないなら、サタンが自らの原則に基づく王国を築く方法はありませんでした。 そこで彼は、最大の偽りを考え出したのです。それは、すべての者は自分自身のうちに命を持っているということでした。この偽りを信じる道はいくつもありました。自分は本来不死であり、不死性はすべての被造物に備わっていると信じることもできました。あるいは、命とは単なる力であり、すべての者がその力につながっていて、自分の望むままに利用できると考えることもできました。または、神が自分に不死の賜り物を与えてくださったのだと信じ、それを最大限に活用することができるという考え方もありました。どの選択肢を選んでも、自分自身に命の源があると信じる限り、問題ではありませんでした。これこそが、宇宙で最も大きな偽りなのです。イエスはこう言われました。

> あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。ヨハネによる福音書 8 章 44 節

神は、御子を拒んだ者たちをそのまま死なせることで、この偽りを即座に終わらせることもできましたが、御子は、自分にとって耐えがたい苦

痛であったにもかかわらず、彼らに命を与え続けられました。宇宙がこの偽りの影響を理解するためには、堕落した天使たちが御子を殺し、破壊したいと望んでいる間も、なお御子から命を受け続けているということが示されなければなりませんでした。サタンとその天使たちがイエスを拒んだとき、彼らは御子からしか受けることのできない従順な信頼と服従の霊を受け取ることができなくなりました。彼らは自分たちの心において、御子の人格と霊を十字架につけたのです。しかし、神はサタンに自らの思想を示す時間を与えるため、命の力を与え続けられました。宇宙が誰が最良の方法を知っているのかを自ら判断できるようにするためです。すでに述べたように、サタンが神に抵抗することを許すには代償が伴いました。それは拒絶される者の命、すなわち神の御子の命を犠牲にするものでした。サタンは初めから人殺しであり、神に逆らうことで、キリストの死を引き起こしたのです。この死は、サタンの心の中で起こっていましたが、それを宇宙に示して、皆が何が起きているのか明らかにされる必要がありました。本来、神はその現れが地上で起こることを望んではおられませんでしたが、悲しいことに、それが現実となったのです。

9. 人類の誘惑

前の章で、私たちは意志という極めて重要な要素について考えました。神が男と女に与えられたこの意志の賜り物によって、彼らは自ら選んで神に従うことができるのです。もし従うことを選ぶ能力がなければ、真の祝福も、御父を喜ばせるという実感も生まれません。そして、御父を喜ばせているという感覚こそが、祝福をもたらすのです。イエスは次のように語られました。

> わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒におられる。わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない。ヨハネによる福音書 8 章 29 節

イエスは、御父の御心に自らの意志をゆだね続けることによって、絶え間ない祝福を感じていました。意志という賜り物がもたらす祝福はこれだけではありませんが、それは本書の研究の範囲を超えるため、ここでは触れません。神がアダムとエバを創造されたとき、彼らが意志を働か

せることができるように備え、選択の自由を与えなければなりませんでした。もし神を悲しませる選択肢がなければ、神を喜ばせるという祝福を受け取ることもできなかったからです。

神は、善悪の知識の木を食べることによって、神に逆らうという選択肢を備え、ご自身を喜ばせる能力を創造されました。

> なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。創世記 2 章 16、17 節

アダムとエバは、毎日この特別な木の実を食べないことを選ぶことで、従順の特別な祝福を受けました。すなわち、神が彼らを喜んでおられるという深い確信です。この木が存在しなければ、彼らはその祝福を受けることができなかったのです。

サタンは天から追放されましたが、神を悲しませる選択が可能となる唯一の場所を通じて、私たちの世界へ立ち入ることが許されました。そのため、私たちはサタンが蛇の姿をとり、善悪の知識の木に身を潜めている姿を目にするのです。この蛇がサタンであることは、黙示録の記述から明らかです。

> この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。黙示録 12 章 9 節

これまでサタンの人生観について学んできたように、アダムとエバを自分の王国へ引き入れようとしたとき、彼は、神への依存を不要にした形で、私たちがどのように人生を受け入れるかについての見方を示したのです。サタンは、こう語りました。

> さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」。女はへびに言った、「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食

べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」。創世記 3 章 1〜5 節

サタンは、神が命じたことを拒むことで神の怒りを買うのではく、祝福がもたらされると示唆しました。彼らの目が開かれ、偉大な知識と知恵を得て、神のようになるだろうと語ったのです。さらに彼は、彼らは決して死なないと述べしました。これはすなわち、神に依存したり信頼したりしなくても、生き続けることができると教えていたことを意味します。彼らは自分自身と自分の判断を信頼することができると考えました。

エバは蛇の言葉を受け入れ、その後アダムのもとへ行き、神を信頼しないように、蛇の大いなる偽りを信じるようにと説得させてしまったとは、なんと悲しいことでしょう。二人がその実を食べ、この偽りを受け入れた瞬間、神に対する理解も、自分自身に対する認識も、そして宇宙の働きに対する見方も、すべてが根本から変わってしまったのです。

偽りを受け入れたとき、アダムとエバは すべては父から流れ出るという信仰から離れてしまいました。彼らは、自分たちの幸福が神を信頼し、従うことにかかっているという考えを否定しました。彼らは神の命令を拒むことによって、実質的に御子の最も美しい性質である信頼の従順と服従を死に至らせたのです。神はアダムとエバに、神への従順をやめるということが、実際には御子とそのすべての存在に対する直接的な攻撃であることを示さなければなりませんでした。アダムとエバは、従順の霊、すなわち神の御子の霊に抵抗することで、心の中で御子を殺したのです。これは理解する上で非常に重要な点です。神に抵抗するという行為そのものが、御子の霊、すなわち従順の本質を殺す行為なのです。だからこそイエスは、ルシファーを初めから人殺しと呼ばれた理由です。

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。ヨハネによる福音書 8 章 44 節

御子を拒み、憎しみへと心を向けたすべての天使たちは、その心の中で御子を殺したのです。聖書は、憎しみと殺人とを明確に結びつけています。

> あなたがたが知っているとおり、すべて兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいないことを、あなたは知っています。ヨハネの第一の手紙 3 章 15 節

神の御子の犠牲は、この地球が創造される前から予見されていました。反逆した天使たちの心の中に何が起こっていたのかを宇宙が理解する唯一の方法は、それが実現して示されることでした。次の言葉に注目してください。

> しかし、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至って、あなたがたのために現れたのである。ペテロの第一の手紙 1 章 19、20 節

神はサタンの反逆に不意を突かれたわけではなく、それに備えておられました。むしろ、父と御子は共に議し、救いの道を計画しておられました。しかし、サタンの反逆によって、その計画が実際に実行される必要性を明確にしました。サタンが「私は天に上り、いと高き方のようになろう」と叫んだとき、その計画の中には、もはや神の御子が入る余地はありませんでした。彼は廃され、滅ぼされる運命にありました。

サタンは自らの反逆の種を人類に受け渡し、その結果、御子は彼らのために命を捧げることになりました。キリストは、物理的な世界において、人類が心の中で従順な神の御子を殺してしまったという現実を示されることになったのです。それは、すべての人の目に見えるように明らかにされる必要がありました。キリストが十字架にかけられたことにより、蛇の働きが暴かれました。これが、モーセが蛇を竿の上に掲げるよう命じられた理由の一つです。十字架刑の行為は、サタンの殺意に満ちた企てが 公然と示される場だったのです。もはやサタンは、キリストに対する真の意図を隠すことができませんでした。

こうしてアダムとエバが罪を犯し、キリストの従順な霊を拒んだとき、彼らはサタンと共に殺人の罪を負う者となりました。キリストはアダムとエバの心の中で殺されてしまったのです。

> 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう。ヨハネの黙示録 13 章 8 節

そののち堕落した場合には、…神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにするわけである。ヘブル人への手紙 6 章 6 節

神の御子を殺したという行為は、次の行為によって神がアダムとエバに象徴的に与えられました。

主なる神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた。創世記 3 章 21 節

皮の上着は、動物から取られなければなりませんでした。これらの動物は、アダムとエバを覆うために犠牲にされなめればなりませんでした。アダムとエバは罪を犯すまでは衣服を必要としませんでした。彼らは神の栄光に包まれていたからです。しかし神を拒んだとき、その栄光を失ってしまいました。小羊が屠られるという行為は、神が御子を遣わし、彼らが心の中で何をしてしまったのかを実際に示されるという約束の象徴でした。それは、神に抵抗することがどれほど恐ろしいことであり、従順を拒むときにどれほど深い呪いがもたらされるのかを彼らが理解できるようにするためのものでした。それは、従順の本質である神の御子を断ち切るのです。

わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。創世記 3 章 15 節

その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。ヨハネによる福音書 1 章 29 節

神の御子が、そこまでへりくだってくださったとは、なんと素晴らしいことでしょう。御子は、従順を拒むことがどんな結果をもたらすのかを宇宙に示されました。それは、父が最も愛しておられるお方、すなわち御子の霊を殺すことです。しかし御子は、この反逆の悲劇に対して、信じられないほどの従順によって応えられました。その従順の現れはあまりにも力強く、宇宙は二度と元の姿にはならなかったのです。また、神の御子がどれほど尊いお方であるかを宇宙に示すものでした。私たちが父への従順とその御命令に対する御霊を大切にし感謝することで、彼を大切にし感謝するということにほかなりません。

10. 要約

私たちはこれまで、聖書から神ご自身について初めに何を啓示しているのかを、注意深くたどってきました。 その中で、次のことを学びました。

1. 真の神はただお一人であり、その方は“父”と呼ばれる。（ヨハネ 17:3／コリント第一 8:6／テモテ第一 1:17）
2. 神は、すべてのいのちと祝福の源である。（ヤコブ 1:17）
3. 神は、ご自身のかたちにおいて御子を生み出し、すべての権威を与え、御自分と等しい者とされた。 （ヘブル 1:1-5／箴言 8:12-30／ピリピ 2:6／ヨハネ 5:26 ; 8:42／コロサイ 2:9）
4. 神の御子こそ、神の御国を開く鍵である。彼には、信頼に満ちた従順と服従、そして祝福という重要な要素が備わっている。（マタイ 3:17／詩篇 40:8／ヨハネ 8:29）
5. 御子の霊は宇宙へ流れ出し、父の戒めに従うことを選ぶ者すべての心に宿る。（黙示録 22:1, 2／ヨハネ 7:37-38／ローマ 8:9, 10）
6. 最初に創造された天使であるルシファーは、神の御子の存在を拒み、御子を礼拝せよという神の命令に従うことを拒否した。（ヨハネ 5:22／ピリピ 2:6／黙示録 12:7-9／ヘブル 1:6）
7. ルシファーはサタンとなり、天使たちの三分の一を私たち自身のうちに命があるのだから、神に従う必要はないという新しい信念へ引き入れた。（黙示録 12:4／創世記 3:4-5）
8. 神の命令に逆らうという行為は、従順・信頼・服従の本質である御子を殺すことに等しい。（ヨハネ 8:44／黙示録 13:8／ヨハネ第一 3:15）
9. 御子は、父のご計画に従い、抵抗が御子に何をもたらすのかを宇宙に示すため、私たちのために死ぬべくこの世に送られた。（創世記 3:15／ヘブル 6:6）

ここまでで、私たちは聖書が示す神と御子、そしてその御霊の姿を示され、さらに彼らがどのように働かれるのかを明確に見てきました。また、命の源に関するサタンの偽りと、彼の抵抗の霊についても触れてきました。ここからは、地上で発展した二つの体系の最初の歩みをたどっていくことにしましょう。

11. 二つの道

前の章では、神とサタンの間にある思考の決定的な違いを見てきました。

- 神の御国は、関係の神聖さを強調するために築かれている。一方、サタンの王国は、力の獲得と所有することに焦点を置いている。
- 神の御国は、従順・信頼・服従による祝福を通して働く。一方、サタンの王国は、神の権威への抵抗と独立による「祝福」を通して働く。
- 神の御国は、他者をどれほど深く知りうるかによって平等を定義する。一方、サタンの王国は、生まれつきの力によって得られる能力・地位・達成によって平等を定義する。
- 神の御国は、家族の構造を通して統治され、その民は愛によって支配される。一方、サタンの王国は、さまざまな力に基づく構造によって統治され、その従う者たちは圧制によって支配される。
- 神の御国は、人格と関係によって価値を定める。一方、サタンの王国は、力によって価値を定める。

これらの違いは、次の聖書の一節でまとめることができます。

> 主はこう言われる。知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。 誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる。エレミヤ書 9 章 23、24 節

歴史を振り返ると、人々の神に対する見解がこの二つの方向に分かれてきたことが分かります。時には、どちらが主要な働きの原理なのか見分けるのが難しい場合もあります。というのも、サタンの王国は力を得るために関係性を利用するため、言葉づかいは非常に関係的に聞こえることがあるにもかかわらず、その中心にあるのはあくまで力に基づいています。サタンがエバに示唆したように、私たち自身のうちに命があると信じることを受け入れるこは、自然と自分自身を神と見なすように導きます。この結果、多くの人間の神の概念は、実際には人間の特性や能力の投影であることがわかります。これはギリシャ神話であり、ゼウス（神々の王）、アフロディーテ（愛と美の女神）、アポロ（音楽・医

術・健康の神）、アレス（戦いの神）といった描写に明確に表れています。これらの神々は、単に人間的特質を神格化したものにすぎず、本質的には自己崇拝・自己神格化であり、エデンの園でサタンがエバに約束したものそのものです。二つの体系を鮮明に示す聖書の人物アブラハムとニムロデを対比させることで、私たちの歴史の歩みをたどり始めたいと思います。

12. バビロンの基礎

アブラハムとニムロデの物語に直接入る前に、その時代に至るまでの歴史を簡単に振り返ります。

サタンの偽りを受け入れた最初の実は、恐れでした。 こちらをご覧ください。

> 主なる神は人に呼びかけて言われた、「あなたはどこにいるのか」。アダムは答えた、「園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです」。創世記 3 章 9、10 節

アダムがサタンの偽りを受け入れたとき、彼は自分のうちに命があると信じるようになりました。問題は、同時に彼が、神のほうが自分よりもはるかに大きく、強力な命の源であることを悟ったことでした。これが、恐れを生み出したのです。もともとアダムは、自分のうちに命があるなどとは信じず、神がすべてを与えてくださる愛の父であると喜んで信頼していたなら、そのような恐怖は決して生じることはなかったでしょう。偽りの最初の実は、**恐れ**です。

偽りが生み出した次の実は、高慢でした。アダムは自分が何をしたのかを神に問われたとき、自分が間違っていたことを認めることができませんでした。 彼の高慢さが、それを許さなかったのです。

> そして、神は言われた、「あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなと、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか」。人は答えた、「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」。創世記 3 章 11、12 節

アダムは、妻を責めました。しかし本来、神の体系において彼は家庭のかしらであり、家族に起こるすべてのことの最終的な責任は彼自身にあることを覚えておくべきでした。妻を責めたということは、妻に自分の行動に影響を与える力があると信じていたという偽りを裏付けるものがあり、そのために彼女を責め、自分は責任を負わなくてもよいと思ったのです。確かに、エバはアダムを誘惑しましたが、選択をしたのはアダム自身であり、したがって責任も彼にありました。それでも彼はそれを認めようとしませんでした。これこそが、偽りの第二の実、**高慢**です。

これら二つの実がバビロンの興隆の種を作りました。

さらに悪しき実が現れることとなりました。アダムとエバは自分たちの過ちを認めたものの、反逆の種は彼らのうちに残り、そのまま息子たちカインとアベルへと受け継がれました。アベルはキリストの従順な霊を大切にし、人類が再び御子を全面的に受け入れるために神が示された回復の道に、謙虚に従いました。一方、カインは神を認めてはいましたが、神のご計画に従うことを拒みました。ここに偽りの第三の実、**抵抗**が現れます。彼は自分の好みに合わせて礼拝の方法を変え、小羊の犠牲を無視ました。アベルは、示されたとおりに従うよう兄に懸命に訴えましたが、聞く耳を持ちませんでした。カインは抵抗し続け、最終的にサタンに導かれ、怒りのあまり弟を暴力によって殺してしまいました。さらにいくつかの実があります。**怒り、憎しみ、そして殺人**です。アベルの殺害は、サタンがキリストに対して抱いていた思いの表れでした。優しく従順なアベルは、サタンに霊感された兄によって命を奪われました。それは、サタンの心の奥深くに潜んでいた、キリストに対する暴力的な感情が初めて歴史の中に現れた証拠でした。

すでに述べたように、抵抗の霊は、神の祝福と承認の感覚を私たちから奪います。神の祝福を失うと、人は不安定になり、自分には価値がないと感じるようになります。カインは、両親の訴えに抵抗し、弟の訴えにも抵抗し、さらには神ご自身の訴えにも抵抗しました。カインの抵抗が大きくなればなるほど、その後に続く不安と無価値感もまた大きくなっていきました。神がカインに呪いを宣告されたとき、それは神が彼に何かを課したものではなく、むしろ、それは抵抗の自然な結果、つまり恐れ、不安、無価値感でした。呪いとは、カイン自身の行動が生み出した当然の結果であり、神はそれを単に述べておられたにすぎません。

> 今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう。創世記 4 章 11、12 節

逃亡者や放浪者という言葉には、さまよい、揺れ動き、不安定といった感覚を与えます。これらが生むさらなる実は、**不安、不安定、そして無価値感**です。

アダムとエバはアベルを失った後、神は彼らにもう一人の息子、セトを与えられました。彼は、アダムやアベルと同じ謙虚な霊を、それ以上に深く示しました。こうしてアダムの家族から二つの系統が生まれました。セトの系統は、父なる神の祝福を深く感じ、神の命令に従うことで、神の子らと呼ばれるようになりました。一方、カインの系統は、反逆と無価値感の実に満たされ、人の子らと呼ばれるようになりました。

サタンは、神が人間関係を家族という形で構造化されていたため、子供たちは親に完全に依存して生まれてくることを知っていました。この関係性は子供たちが神への依存を学ぶ助けとなるでしょう。子供たちに服従という貴重な特質を教える中心的な役割を担うのは母親でした。そこでサタンは、神の子らに人の娘たちを妻として求めて結婚するよう誘惑しました。カインの娘たちは、彼らの父たちが抱えていた霊、すなわち恐れ、高慢、反逆、怒り、憎しみに満ちていました。これらのすべての悪しき実は、外見を美しくすることを身につけた女性たちの心の奥深くに隠されていました。神の子らは彼女たちの品性を見抜けず、彼女たちを妻として迎えた。この結びつきが、史上最も邪悪な暴君たちを生み出すことになりました。聖書は彼らを巨人と呼んでいますが、その意味はむしろ、 巨大な自我と権力獲得への執着により近いでしょう。

> 人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、 神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとった。そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であろう」。そのころ、またその後にも、地にネピリムがいた。これは神の子たちが人の娘たちのところにはいって、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士であり、有名な人々であった。 主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。創世記 6 章 1～5 節

短期間のうちに、イエスの愛に満ちた従順の霊は、神の子らの心から消え去り、人々の思いはほとんどすべてが絶えず悪に傾くようになりました。神はご自身の霊を退けられ、悪と破壊と暴力を止めるために洪水を許されました。彼は父の罪を子孫に、三代、四代にまで報いました。神はノアとその家族から再び始められましたが、やがてサタンはハムを通して入り込み、バビロン王国の基礎を築きました。ハムは旧世界の悪しき人々の影響を受けていました。ある日、彼は父ノアが天幕の中で裸になり、酔っているのを見つけたとき、父に対して干渉し、極めて卑劣な行為を行いました。その結果、無価値感、不安、反逆という実が生まれ、彼の子孫は増大した不安と恐れに対処するために、支配と統制と悪の新たな高みに達することになりました。

ニムロデはハムの孫でした。 彼について聖書は次のように記しています。

> クシの子はニムロデであって、このニムロデは世の権力者となった最初の人である。彼は主の前に力ある狩猟者であった。これから「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが起った。彼の国は最初シナルの地にあるバベル、エレク、アカデ、カルネであった。創世記 10 章 8〜10 節

勇士という言葉は、強力な暴君を意味します。ニムロデには従順さのかけらもありませんでした。彼は聖書に登場する最初の王の称号を自ら名乗った人物であり、天の神を認めることなく、自分自身の王国を築いたと記されています。その王国の最初の都市が、バベル又はバビロンでした。ここまででニムロデの性質の基礎が明らかになったので、次に、彼が築き上げた宗教の要素を詳しく見ていくことにしましょう。

これらの問題について、さらに詳しい分析については、maranathamedia.com/book/view/life-matters から書籍「Life Matters」をダウンロードしてください。

13. バビロンの本質

ニムロデの複雑な性格を作った要素を総合的に考えると、彼がどのような崇拝体系を築き上げたかが、ほとんど推測できます。抵抗の霊に満ちていた彼が作り出すものは、聖書が示す神の姿とは まったく正反対のも

のであり、まさにそれがニムロデが築き上げたものです。ここに、歴史家ヨセフスがニムロデの思想の基盤について述べた言葉を引用します。

> 「今や彼らにそのような神への侮辱と軽蔑を駆り立てたのはニムロデであった。彼はノアの息子ハムの孫であり、大胆な男で、優れた腕力を持っていた。彼は人々に、その力を神に帰するのではなく、まるで自分たちの勇気によって幸福が得られたかのように信じさせた。また彼は徐々に統治を専制政治へと変えていった。なぜなら、人々を神への畏れから遠ざける他の方法を見いだせず、ただ彼らを自分の力に絶えず依存させることでそれを成し遂げるしかなかったからである…」 ヨセフス『古代誌』第 1 巻第 4 章 2 節。

ニムロデは、蛇の偽りを選ぶことによって、神の祝福をはっきりと拒否しました。彼は品性ではなく、力に目を向けることをを選びました。そして、彼は人々に、神ではなく自分自身に目をむけるように教えました。これは、サタンがアダムとエバに教えたのとまったく同じ哲学です。この哲学は、家族の構造に劇的な影響を及ぼすことになりました。ある歴史家は、この点について次のように述べています。

> それまでの指導者の権威は、親族の感覚に基づいていました。族長の支配力は、親が子を支配する姿の象徴でした。これに対して、ニムロデは領土の主権者であり、人々に対しては彼らがその住民である限りにおいて、個人的なつながりに関係なく主権を持ちました。それまでは、拡大した家族としての部族、すなわち社会がありました。しかし今や、ニムロデの登場によって、国民、政治的共同体、すなわち国家が生まれました。A.T.ジョーンズ『聖書の帝国』1904 年、51 ページ

かつての家父長制は、父が長となり、母が養育する家庭への従順によって祝福が得られるという原則を強めるだけのものでした。ニムロデは、このすべてを変え、作物、土地、建物といった目に見える資産を持つ領土の支配者に焦点を当てるようにしました。かつて家族は遊牧民であり、親族の感情に基づいて統治され、権威は関係への尊敬によって成り立っていました。ニムロデは、権力への恐怖心を利用して人々を支配し、専制によって人々を服従させました。

ニムロデは、夫婦関係に刻まれた神の像を完全に打ち砕くために、さらに衝撃的な一歩を踏み出しました。彼は自分の母を妻としたのです。こ

のような結婚関係は、父と子の関係を映し出す本来の結婚の姿から、最も遠く隔たったものと言えます。

ニムロデが死んだとき、彼の妻であり母でもあったセミラミスは、ニムロデは太陽に姿を変え、民の守護者であり供給者となったと宣言しました。こうしてセミラミスは、物質界と霊的世界をつなぐ重要な存在となりました。これにより「天の女王」（エレミヤ 7 章 18 節）という称号を得ることになりました。彼女とのつながりは、ニムロデの保護と力にアクセスするための入口でした。この崇拝体系は急速に広まり、太陽崇拝体系は当時の世界の多くの地域に広まりました。その結果、日曜日（太陽の日）は、週の中で最も重要な礼拝の日はとなり、創世記 2 章 3 節に記された、安息日に来る神の子による特別な祝福とは対照的な体系が形成されました。セミラミスにはタンムズという息子がいました。彼女は自らの地位を守るため、タンムズは太陽の光線、すなわちニムロデによって直接受胎したのだと主張しました。こうしてニムロデはタンムズとして生まれ変わったのです。この輪廻転生の過程は、春の再生と自然崇拝と結びつけられた。春と夏の緑が終わると、タムズを嘆く祭りが行われるようになりました。この崇拝は、幼子を抱く像（母）マドンナとして象徴されました。

> そして彼はわたしを連れて主の家の北の門の入口に行った。見よ、そこに女たちがすわって、タンムズのために泣いていた。エゼキエル書 8 章 14 節

セミラミスを通して、魂の不死という教えが広まり、ニムロデという人物における人類の神格化、権力の崇拝、そして雨や豊穣を得るためのさまざまな儀式は、全てバビロニアの秘儀の一部となりました。セミラミスがニムロデの力にアクセスする入口とされたため、男性が女性と性的に結びつくことでその力を得るという儀式が発展しました。こうして神殿娼婦の慣習が生まれ、太陽崇拝には性的行為が礼拝の一部として組み込まれるようになりました。強い家族の絆がなければ、この崇拝体系は肉欲的な心にとって非常に魅力的に映ることが容易に想像できます。

ここで私たちが強調すべき重要な点は、権力の欲望が最大の目的となると、私たちがそれを求める相手の実際のアイデンティティはもはや重要でなくなるということです。人のアイデンティティが重要となるのは、関係性が中心となる体系においてのみです。バビロンの崇拝体系は、三つの存在が神秘的に結びついているという概念を中心に展開していました。ニムロデはセミラミスの息子でありながら夫でもあり、さらにタン

ムズとして生まれ変わったとされたため、個々の人物の実際の正体は曖昧になり、三つの人格を持つ一つの神という神秘的な存在へと融合していきました。すでに述べたように、崇拝の焦点が力であるならば、その力を持つ者の実際のアイデンティティを知る必要はありません。これは天の神への崇拝とは完全に相反しています。天の父と御子の関係にある喜びと祝福にあずかるためには、父と子の実際のアイデンティティを知ることが不可欠です。彼らのアイデンティは決して混同されてはならず、融合されたり、神秘化されたりしてはなりません。この過程が行われている場所では、聖書の父と子ではなく、サタンによって創造された力が崇拝されていると確信することができます。

私自身の経験やキリスト教の文脈で関わってきた人々の様子を見ても、聖書のある箇所で実際に誰に向かって語られているのか、また祈りの中で自分は誰に向かって話しているのかについて、多くの混乱が存在することに気づかされます。実際、祈るときに誰に祈っているのか分からない、誰かを置き去りにしてしまうのではないかと不安になると語る人を何度も見てきました。この混乱は、まさにバビロニア的な体系から直接生じたものであり、父と子の品性を求めるのではなく、力を求める姿勢をさらけ出しています。もちろん、求める側はそのことを意図しているわけではありませんが、教えられてきた体系が、彼らをこの神秘的な混乱へと導いてしまうのです。バビロニアの体系は、神を敬い愛することを主張して設立されましたが、実際には神を忘れさせ、人間を神の座に置く手段となっています。

バビロニアの太陽崇拝について語られる歴史は数多く存在しますが、私たちが注目すべき重要な点は、聖書が啓示する神の姿に関連する哲学的な基盤です。ニムロデ、セミラミス、タンムズの崇拝体系は、次の点に焦点を当てています。

1. 先天性不死性の信念
2. 力と強さは内面から生じる
3. 父権/祝福制度を拒否し、独裁者/暴君 – 母と息子の関係を重視する
4. 歪んだ家族関係
5. 都市建設と領土・財産の獲得への執着

この体系こそ、人間が善悪を知る神のようになるというサタンの約束の成就です。これらの要素のいずれかを含む崇拝体系は、サタンの王国の

影響を深く受けています。忘れてはならないのは、この崇拝形態が、恐れ、誇り、反逆、そして性的堕落という、聖書が啓示する神とはまったく相反する精神から 直接生じているという事実です。

14. 継承の系統

ニムロデとその仲間たちが、神の観念を形成する際にたどった過程に注目することは有益でしょう。使徒パウロは、この時代と人類にもたらした影響について、非常に簡潔で鋭い分析を提示しています。私たちは、この分析を本章の考察の枠組みとして用いることにします。

初めに、神はご自身のかたちに人を創造されました。このことについては、すでに***御姿にかたどって***という章で考察しました。神が人をこのような姿に創造された理由の一部は、ご自身と御子との関係について、宇宙にさらに深い理解を与えるためでした。この点について、パウロは次のように述べています。

> なぜなら、神について知りうる事がらは、彼らには明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。ローマ人への手紙 1 章 19、20 節

サタンがこの神の知識が理解されるのを防ぐために、夫婦関係を直接攻撃するのは最も効果的な手段でした。パウロはニムロデの歴史を非常に簡単に要約していますが、私たちは、それを一つずつたどっていきます。

> なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられた。彼らは神の真理を変えて虚偽とし、創造者の代りに被造物を拝み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アァメン。ローマ人への手紙 1 章 21～25 節

ハムの孫であったニムロデは、天の神についてをはっきりと認識していました。しかし、力は神から来るのではなく自分のうちにあるという偽りを受け入れたとき、彼は神をあがめることも、神の祝福に感謝することもやめてしまいました。その結果、ニムロデとその仲間たちは、自分たちが何者であるかについて虚しい、誤った自己認識へと陥っていきました。神によって慎重に定められた男女の役割は完全に歪められ乱され、天からの祝福の通路は断ち切られてしまいました。御子の甘美で従順な霊は、もはや彼らの家に入ることを妨げられ、彼らの心は暗くなっていきました。女性の解放と新しい性的自由は進歩的で賢明なものと見なされましたが、 実際には彼らを愚かにするものでした。

私たちはすでに、ニムロデの死後、セミラミスがニムロデは太陽に宿る神であると主張したことに注目しました。神の概念は朽ちる人間へと変えられつつありました。人は、自分の命がどこから来るのかという感覚を腐敗させ、神が示された男女関係の神聖な模範は失われていきました。ニムロデの力にアクセスするために女性を礼拝するという偽り、タムンズにおける二ムロデの再誕、そして鳥や四足の獣、這うものを巻き込んだ自然崇拝は、いずれも人間のうちに刻まれた神の像を汚し、神の真理を偽りへと変えてしまいました。

バビロンの神は基本的に権力の崇拝と追求でした。すでに述べたように、権力の追求は崇拝の対象となる存在のアイデンティティにはほとんど関心がなく、彼らがどのような性質を持つかよりも、どれほどの力を持っているかの方が重要とされるのでした。ニムロデ、セミラミス、タムンズのアイデンティティが神秘的に融合されたことは、男女それぞれの本来のアイデンティティや互いの関わり方に直接的な影響を与えました。性行為そのものが、関わる者のアイデンティティよりも重視されるようになり、その象徴性は全く異なる意味を帯びるようになってしまいました。

> それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた。すなわち、彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代え、男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである。そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。ローマ人への手紙 1 章 26～28 節

バビロン的崇拝体系において、同性愛的行為は自然な展開として現れてきます。なぜなら、この体系では性行為そのものが、相手から力を受け取る手段として理解されていたからです。これは、門番的役割を果たしたとされるセミラミスの教えにも指摘されています。家長と服従の概念はもはや重要ではありません。自己崇拝と力の追求の中で、聖書における男性と女性の本来の象徴的意味は失われてしまいます。そしてパウロは、このような道筋の行き着く先を次のように述べています。

> あらゆる不義と悪と・欲と悪意とにあふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言する者、そしる者、神を憎む者、不遜な者、高慢な者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり、無知、不誠実、無情、無慈悲な者となっている。彼らは、こうした事を行う者どもが死に価するという神の定めをよく知りながら、自らそれを行うばかりではなく、それを行う者どもを是認さえしている。ローマ人への手紙 1 章 29〜32 節

人々は、なぜこの世界にこれほどまでの暴力、憎しみ、不道徳が満ちているのかと不思議に思います。しかしローマ人への手紙第 1 章は、それがどのように働き、なぜそのような結果になるのかを明確に示しています。したがって、要約すると、継承の系統は次の通りです。

1. すべての命と祝福が、父なる神とその御子から来るという事実を忘れること
2. 人間のうちに命の源があると信じること
3. 家長と服従の祝福原則を保つ家族制度の破壊
4. 性の歪曲
5. 祝福の欠如による、無価値感・恐れ・誇り・怒り・憎しみ・殺意の増大
6. 人間関係の堕落を神に投影すること：つまり、アイデンティティを曖昧にし、人格より権力を崇拝すること

これが、バビロンに捕らえられていく過程です。聖書におけるバビロンの概念は、単なる物理的な帝国以上のものです。それは、人間の心に対してこれまで考え出された中で最も攻撃的で、最も暴力的な攻撃を現しています。その心を支配する力は、息をのむほどです。その働きの隠密さは、恐ろしいほど巧妙です。その動きの手段と形態は多岐にわたりま

す。一度捕らえられたら、その鎖を自力で断ち切ることは不可能です。ただし、例外を除いて。

アブラハムの物語を学ぶならば、話は変わってきます。アブラハムの物語は、バビロンから脱出する重要な説話を私たちに示しています。アブラハムはバビロンの地から来ました。彼の家族はバビロンの崇拝に深く関わっていましたが、アブラハムは、その中から抜け出したのです。パウロがローマ書を始めるにあたり、まず福音における神の力について語り、その後にアブラハムの生涯における過程を詳しく示していることは、非常に重要です。

> わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。ローマ人への手紙 1 章 16〜18 節

> このようなわけで、すべては信仰によるのである。それは恵みによるのであって、すべての子孫に、すなわち、律法に立つ者だけにではなく、アブラハムの信仰に従う者にも、この約束が保証されるのである。アブラハムは、神の前で、わたしたちすべての者の父であって、「わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした」と書いてあるとおりである。彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり、多くの国民の父となったのである。すなわち、およそ百歳となって、彼自身のからだが死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であるのを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。ローマ人への手紙 4 章 16〜21 節

アブラハムのバビロン脱出の物語こそ、キリストの福音の中心そのものです。次に目を向けるのはこの物語です。先に述べた 6 段階の継承の系統を解消する過程を学び、バビロンの鎖を断ち切り、「バビロンは滅びた！」と叫ぶことです。

15. バビロンからの召し出し

バビロンの神秘的な偶像崇拝は、ほぼ全世界に広がっていきました。聖書は、次のように語っています。

> バビロンは主の手のうちにある金の杯であって、すべての地を酔わせた。国々はその酒を飲んだので、国々は狂った。エレミヤ書 51 章 7 節

バビロンのぶどう酒とは、まるで酔ったかのように心を混乱させる、神についての彼女の神秘的な教えです。これらの教えは家庭を破壊し、天の父からの祝福を断ち切り、深い無価値感、怒り、不安、そして権力への必死の欲求を生み出します。

バビロンの影響は、遊牧民の家族を基盤とする部族を、軍隊によって守られる領土に基づく国家に変えることでした。小さな村々は、防衛を容易にするために、大きな城壁に囲まれた都市へと変わりました。軍隊を維持するためには食糧と武器が不可欠であり、その供給のために課税制度を整える必要がありました。課税を確実に行うためには、専制的な王権政治が求められました。絶え間ない流血の現場にさらされることで男たちの心は硬化し、家族から長く離れる生活と、バビロンの不道徳な崇拝慣習が相まって、売春は急増しました。その結果、家庭が荒廃し、女性は家畜同然に扱われることさえありました。ただし、神殿娼婦だけは例外で、 宗教的役割のために手厚く保護されました。

この一連の過程はすべて、サタンの策略の一部であり、人間から神の像を損ない、その尊厳を奪い、神との戦いにおいて自らの目的のために従わせることを意図していました。神は、あわれみ深い愛をもって応え、一人の人物を呼び出し、父の祝福を受け継ぐ家族の王国を再び築かれたのです。その中には、最も貴重な特性である、次の世代に天の父とその御子に従う方法を教える養育的で従順な妻という使命がありました。アブラハム、もともとはアブラムとして知られていた彼は、ニムロデの時代のすぐ後に生きていましたが、いくつかの証拠は、彼らの生涯が重なっていた可能性を示しており、その頃はバビロンの宗教が地球の広い範囲を支配していた時代でした。

> 時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大

いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。創世記 12 章 1〜3 節

アブラムが去るべき場所は、ニムロデの帝国、カルデア人の中心地そのものでした。

テラは七十歳になってアブラム、ナホルおよびハランを生んだ。テラの系図は次のとおりである。テラはアブラム、ナホルおよびハランを生み、ハランはロトを生んだ。ハランは父テラにさきだって、その生れた地、カルデヤのウルで死んだ。創世記 11 章 26〜28 節

神はアブラムをその生まれ育った家から連れ去らなければなりませんでした。彼が慣れ親しんでいた結びつきや礼拝習慣を断ち切るためでした。神はアブラムに、父と御子の関係を基盤とする家族の王国の知識を授け、祝福しようとされました。さらに神は、二人がこれらの原則を十分に学び取るまで、サライの出産能力をあえて遅らされました。

神はアブラムを、祝福の器とするために、彼を家族があるべき姿の模範として立てられました。アブラムとサライの家族原則を受け入れる者は皆、天の父から流れる祝福の鍵を見いだし、力ではなくそのままの自分自身が愛されているという確かな確信を心に受け取ることができたのです。アブラムに約束された偉大な王国は、明確な家族構造の上に成り立つものでした。

アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである。創世記 18 章 18、19 節

「わたしは彼を知ったのである」（創世記 18 章 19 節）という言葉には、神とアブラハムの間にある深い親密さが込められています。神はアブラハムに、妻と子どもをどのように世話するかを教えられました。神は、夫と父が天の父の祝福を家族へ注ぐための器として 初めから設計されていたことをアブラハムに説明されました。夫であり父親は、妻によって子供を育むための肉体的な種だけでなく、妻に感謝と愛情を感じさせ、

子供に目的と価値を与える霊的な種も託されていたのです。この点について、箴言は次のように語っています。

> 孫は老人の冠である、父は子の栄えである。箴言 17 章 6 節

アブラハムが妻や子供たちを祝福することができたのは、サラの従順の精神に大きく依存していました。彼の権威は、サラが彼に与えた分の大きさに左右されたのです。彼女が祈りをもって夫を支え、神が彼に正しい言葉と判断を与えてくださると信頼し、夫の言葉に従い信頼するほど、子供たちは彼女の言うことがいかに重要であるかを理解しました。子供たちは父親の言葉がどれほど重要で力強いかを母親を通して判断します。使徒ペテロは、サラがどのようにして 夫アブラハムを尊重する心を育てたのかを語っています。

> むかし、神を仰ぎ望んでいた聖なる女たちも、このように身を飾って、その夫に仕えたのである。たとえば、サラはアブラハムに仕えて、彼を主と呼んだ。あなたがたも、何事にもおびえ臆することなく善を行えば、サラの娘たちとなるのである。ペテロの手紙一 3 章 5、6 節

アブラハムとサラはバビロンの地から来たため、学ばなければならないことがたくさんありました。彼らは道の途中で何度も間違いを犯し、それがサラにイサクが与えられる時を大いに遅らせることになりました。しかし、数々の試練と教訓を経て、アブラハムとサラは、ついに神の祝福がイサクに注がれる道を開いたのです。イサクは、神の御子の霊に満たされ、十字架上のイエスのように死に従うことを喜んで受け入れるほどに 従順の精神を身につけました。アブラハム自身もまた、どれほど状況が不可能に思える時でも神を信頼することを選び続けることで、服従の精神を大切にすることを学びました。

> これらの事の後、神はアブラハムを試みて彼に言われた、「アブラハムよ」。彼は言った、「ここにおります」。神は言われた、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」。そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答えた、「はい、ここにおります」。み使が言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの

子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。創世記 22 章 1、2、10〜12 節

たった一人の人間の生涯のうちに、神がバビロンの神秘的で人を束縛する思想体系をアブラハムの心から完全に打ち砕き、天の真の神への礼拝を取り戻すことが出来たと考えると驚くべきことです。アブラハムのバビロンからの旅路は、今日の私たち自身の旅の土台ともなるものです。天の真の神とその御子は、この世の偽りの神々から私たちを呼び出し、私たちの価値は成し遂げたことではなく、家族の関係そのものから生まれる王国へと導いておられるのです。

本書で紹介した原則は、 fatheroflove.info にある *Life Matters* という書籍の中で さらに詳しく説明されています。 サタンの王国を打ち破る家族の祝福制度について、天の父とその御子に関する正しい知識を通して どのように理解し、どのように実践していくのか、 その全体像をより深く知りたい方は、 ぜひ *Life Matters* をお読みください。

神の知恵

子を持つ者は命を持ちます。なぜそう言えるのでしょうか。それは、神の御子のうちに 父に従う純粋な心が宿っているからです。御子は常に父を喜ばせることを行います。また、父の祝福と深い愛情を受けています。御子の心は、完全に父の愛に安らぐのです。天の父は、その愛する御子の御霊を宇宙と分かち合えることを望まれました。それは父の戒めを愛する、優しく、穏やかで、従順な霊です。キリストこそ神の知恵であり、愛に満ちた関係の王国を支える確かな拠り所なのです。

この穏やかな御霊は、神の御座から命の木を通して流れ出ています。サタンは神の御子とその穏やかな御霊を拒み、彼の反抗的な霊は御子の柔らかく、謙遜で、従順な霊と対立しました。この反抗的な霊が人類へと受け継がれてしまったのです。しかし、キリストの犠牲によって、私たちは再びこの穏やかな御霊を受ける道が開かれました。この御霊を持つ秘訣は、父と御子がどのようなお方であるかを知ることです。永遠のいのちとは、神である父と、父が遣わされた御子を知ることであり、神と小羊の御座から流れ出るいのちの水の泉から飲むことであるのです。